

東日本大震災を振り返って ～ 発災後15時間の自分～	広域調整第二課
	早坂純一

東日本大震災発災当時、私は宮城県気仙沼警察署で勤務していた。あの日、地震・津波に直面したが、幸い生き延びた。被災現場では苦しい思いの連続だったが、気仙沼を離れる時には、何とかやり遂げたという充実感があった。あれから3年、今、冷静に当時のことを思い浮かべると、特に発災直後の初動活動における自分の動きに反省すべきところが見えてきた。

発災当日、沿岸沿いで街頭活動をしていた時、今までに経験したことのない大きな揺れに襲われた。間もなく大津波警報が発令され、頭が真っ白になりながら警察署に戻った。警察署の中は机やキャビネットが倒れ、書類が散乱していた。すでに多くの署員は日ごろの訓練のとおり避難広報をしながら山の上の独身寮へ向かい、留置人も車両で避難させていた。警察署に残っていた署員は重要物品を最上階へ移動したり、地震後の状況をホワイトボードに記載していた。「ここでそんなことをしている場合ではない、とにかく逃げろ。」と大声で叫びたかった。しかし、私自身、パニック状態で体が固まり、声が出なかった。その時、駐在所勤務員からの一方的な無線により管内の海岸に津波が押し寄せてきているのを知った。まもなく警察署にも津波が来る。署長と協議をし、私以下9人が警察署に残ることになった。最後に署長を送り出し、逃げ遅れて避難してきた高齢者や車いすの住民を3階の道場に上げた。避難住民は20人程になった。そして、屋上で見張りをしていた若手職員が奇声を発した。「津波が来た。」

車やドラム缶や建材等がぶつかりながら流されてきた。徐々に水かさが増す状況を3階から見下ろしていたが、「止まれ、止まれ。」と祈ることしかできなかった。警察署の1階は完全に破壊され、2階に浸水する直前で、やっと津波の勢いが止まった。ほっとするのもつかの間、今度は川を挟んだ向かいの地区から炎が上がった。周りは薄暗くなって雪も舞ってきた。だんだん火の手が大きくなり、警察署に迫ってくるように見えた。しかし、川の堤防に囲まれた地形で警察署内の水が引かない。その時、同僚が「逃げましょう。」と私に懇願した。私は迷った。残った警察官9人で20人もの避難住民をどのように助けるか。水は腰のあたりまでである。水の底は真っ黒で見えない。「マンホールの蓋が開いていたら。鋭利なものが沈んでいたら...。」二次災害の危険が大きい。「もう少し待て。」私の口から出たのはそれだけだった。強行突破に備え、署内のいたるところからロープ、紐を集めた。数珠つなぎにロープを体に結び一直線で逃げる作戦だった。交代で見張りをし、火災と津波の状況を逐次、把握し

た。どこまで火が近づいたら決断するか、明確なボーダーラインはなかった。本能で命の危険を感じたら動く。緊張という簡単な表現で表せる状態ではなかった。いつの間にか、外は朝の太陽の光が差してきた。幸い、火の手が警察署に来ることはなく、強行突破の決断を下すことはなかった。結果的には、動かなかったことで間違いはなかった。しかし、現場の責任者として、同僚への指示、対応が正解だったかは、いまだにわからない。

災害等の有事に備え訓練はそれまで何度もやっていたし、いざ大規模な災害があっても何をやるべきかは、頭では分かっていた。それでもあの震災時、体験したことのない大きな地震、津波を目の当たりにして、突如パニック状態になり、上手く動けなくなった。必死で冷静になろうとする自分がいたが、固まった状態からは、なかなか脱出できなかった。また、現場の責任者として決断しなければならない時、リスクや抱えるものが大きいほど真の恐怖を感じ、スピードが鈍ることを痛感した。そのことで同僚を不安にさせてしまったことを反省している。

災害現場に立ち向かうための完璧な策はないと思う。ただし、いかなる状況でも迅速な決断、対応をし、同僚や住民を守るためには、自分自身、常に最悪な状況をシミュレーションし、愚直に訓練を繰り返すしかないと考えている。次に来る大きな危機に備え、止まってはられない。

震災を振り返って	東北管区警察学校
	藤原律子

宮城県情報通信部で勤務していた平成23年3月11日午後2時46分、私は、工事完了後の国有財産の状況を確認するため、上司とともに気仙沼市内の出張からの帰路にあり、仙台市内の交差点を右折しようとして停車している車の中で地震の揺れを感じました。道路両側のビルが倒れてくるのではと思えるほどの相当大きな揺れでしたので、そのままハザードランプを点けて停止していました。30秒ほど経った頃、一帯の信号機は滅灯してしまいました。

地震により県内の主要中継所は停電し、発動発電機でかろうじて動いている状況でした。皆、地震の恐ろしさを肌で感じながらも警察通信網を途絶えさせてはいけないという思いから、通信部一体となってこれを死守しようという意気込みで精力的に動き回っていました。沿岸部の被害は壊滅的で、津波被害のなかった内陸部でさえ停電や物資不足から店舗を営業できず、発動発電機の燃料はもちろん職員の食料さえも足りませんでした。

何度も何度も、かろうじて確保した燃料を無線中継所へ運び、発動発電機の運転時間を延ばしていく、その作業はとても過酷でつらいものでした。庶務課員は燃料と食料を調達し、その燃料補給作業をバックアップしていました。確保できた燃料と発電機の消費燃料を計算しながら日々綱渡りの状態でした。ほどなく、自衛隊の協力により燃料の補給ができるようになりましたが、この協力がなければ中継所を長期間守ることはできなかったのではないかと思います。

機動警察通信隊で保有していた非常食はたった1日で底をつき、炊飯器や家にあった米や調味料を持ち寄り、10日間ほど炊き出しを行いました。販売制限や買い占め等により僅かしか調達できなかったため、一つの梅干しを3つに分けた塩むすび等しか作ることができませんでした。それでも職員は文句を言わず、力も出ないような粗食を摂り黙々と業務をこなしていました。数日後、大手スーパーが営業を始めましたが、勤務を終えてから向かって営業が終了していたり、疲労困憊した身体では早朝から何百人もの長蛇の列に並ぶこともできず、自力で食料や着替えを調達することはとても困難でした。1週間ほどでみんなみるみる痩せこけていくのがわかり、いつ倒れる人が出てもおかしくない状況でした。状況を管区へ訴えると、すぐに全国から支援を申し出る声上がり、次の日には支援機材や物資が届き始めました。とてつもない警察の組織力を思い知らされました。この支援があったからこそ、大惨事を乗り越えられたのだと思います。

ですから、せっかくいただいた支援を無駄にしないよう、必要な時期や量をとりまとめ、受け入れることが重要な作業となったのです。現場の状況を把握しなければ、それはできません。特に、極限の状況の中で、現場のニーズに対しいかに対応していくかということの難しさを痛感しました。今となっていえることですが、もっと早くに支援を求めるべきであったと思います。我慢してしまうのは東北人の良いところでもあり、悪いところでもあるのではないのでしょうか。

また、今回の大震災では、日々刻々と変わる現場の状況を把握し、まとめ、それに対する最善策を検討し、その結果を現場に打ち返すという、全体の情報共有が非常に重要であると感じました。現場の様々なニーズに応える為に私たちも一緒に現場へ行っているつもりで、机上の空論にならないよう、今回の大震災での経験を生かして業務に取り組んでいきたいと思います。

警察職員としての使命感

岩手県情報通信部

宮田裕隆

キュイン、キュイン、キュイン。「でかいの来る。」「テレビつけろ。」「宮城県沖だ。」怒濤の叫び声が飛び交う。

ぐらぐら、やばい、庁舎は持つのか？壁や梁が震えながら軋んでいるのがわかる。「長い、長い、長い。何で地震が収まらないんだ。」不安を抱きながら収まるのをただ待つしかなかった。作業中の地震であったので即作業を中止し、最低限の処置で岩手県情報通信部の事務室へ戻った。

目に入ってくるヘリテレ映像、一瞬映画のワンシーンと見間違えてしまうほどに現実味のない映像だ。情報が錯綜している。こんな中、大船渡方面へヘリテレ映像確保のため可搬衛星、可搬追尾の装置を持ち配置につくよう指示を受けた。

出発は21時となり、周りは真っ暗である。真夜中でもこんなに暗い盛岡市内は見たことがない。しかし、なぜか空だけは晴れている。現地へ到着し、見通しの良い場所を探し周りを見ると、避難してきた車がたくさんいるのがわかる。これからどうなるのか、何が起こるのか全くわからないが、信頼できる同僚や上司と一緒にいるだけで、なぜか安心できた。機器設営の準備をしながら、ふと空を見上げると周りの明かりが全くないので星が空に冷たく刺す様に光っている。あまりに綺麗すぎて星と星の間の暗闇に全てを呑み込まれてしまいそうな恐怖すら覚えた。なんと皮肉な星空だろうか。夜が明け始め、段々と町中の様子がうかがえるようになってきた。静けさから遠目には一見穏やかな休日の朝のようにすら映る。しかし、よく見れば船は陸に上がり、建物は全半壊状態、災害の様子を再認識させられた。目に入ってくる光景は大自然の脅威を思い知らされる物ばかりである。「この中で自分は何ができるのだろうか？」「警察職員として、一人の人間として何ができるのだろうか？」目の前の情景に深く考えさせられた。自分の小ささと警察職員としての職責が頭の中で交差する。今できることは警察通信を維持して、警察活動の生命線である通信を確保し、警察活動がスムーズに行えるようにすることではないか。自分は警察通信を維持する為にできることをやっ払いこう。

本部へ帰ると無線中継所の電源維持のため軽油を徒歩にて運ぶように指示を受ける。車道が津波で流され山道を徒歩で上がるしかない。地図を見ると非常に急な登りが続くではないか。20キロ以上の荷物を背負って歩くと思うとこれを見ただけでへこたれてしまいそうである。しかし通信を確保するために頑張ろうと決めたのだ。最前線の中継所であるここが止まってしまうと警察活動に大きな影響が出てしまう。「何

としても守るぞ！！」強い意志の元、上山^{注1}する。車両での上山ルートは、土砂崩れで通れない状況だった。(注1 車両や徒歩で山を登ることの意味)

これから電力が回復するまでの約2か月間、交代での泊まり込みが始まった。

思い返すと何が大変だっただろうか？トイレ？食事の確保？機器の維持管理？等あったが一番私を困らせたのは杉花粉であった。周りの山々で黄色い風が吹いている…。マスクで防備するも効き目なし。完全に鼻が詰まって常に口呼吸。味覚にはあまり支障がないように思えるが、食べる物はしょっぱいか甘いかの味しがない。あのカレーですらしょっぱいだけだ。普段色々な香りを楽しみながら食事ができることに、この時ばかりは感謝した。目には浮腫ができて常にゴロゴロ。眼球に水膨れができて、常にゴミが入ったような状態。顔はむくんで辛い。交代者には「顔どうしたの？」と聞かれるくらいむくんでいた。しかし、他県から応援に来て、一緒に中継所維持のため泊まり込んでくれている応援者が頑張っているのに、自県の私が根を上げる訳には行かない。頑張って収束するまでやり抜こう。

今回の震災では本当に色々なことを考えさせられ、また教えられたことも多くあります。

一つは警察職員としての意識が高まったと感じます。今までは漫然と「今やっている仕事が役に立っているのかな？」と思うこともありましたが、今は確信を持って役に立っていると答えることができます。

また、一つは同僚や上司の方々が心強く思えたことです。技術的なことであれば、何とかしてやるという気持ちはありますが、何ともいえない漠然とした不安やこれからどうなるのか先の見えない状況で、同僚と笑い話をするだけで気持ちが楽になりました。

不謹慎ではありますが、千年に一度といわれる未曾有の大災害、なかなか体験できないことを体験し、考え方に幅ができたと思います。また、このような大災害にあった時に警察職員であって良かったと感じています。微力ではありますが、組織の一員として皆様の力になれたことを、本当に良かったと思っています。今後もこの体験を糧として仕事に、私生活に頑張っていきたいと思っています。

あのかとき私は、岩手県の県央部に位置し、県庁所在地である盛岡市の南側地域の一部と、矢巾町及び紫波町を管轄する紫波警察署生活安全課に所属し、3月の定期異動に伴い、釜石警察署の内示を受け、3月15日の発令日に備え、机周りの書類や、職場の荷物を整理し、転勤の準備を少しずつ始めていた。

荷物を段ボールに詰め、署の駐車場に止めたマイカーにそれらを積み込み、一旦官舎まで運ぼうとしたそのとき、3月11日午後2時46分を迎えた。

1 大津波警報発令

私の近くに居た同僚の携帯電話から、けたたましい緊急地震速報が鳴り響いたかと思うと、ゴゴゴゴォーと地鳴りがした直後、これまで体感したことのない激しい揺れに襲われ、国道のアスファルトが波打ち、署庁舎は見た目でも分かるように左右に大きく、そして長く揺れた。

「これはただ事ではない。大変な被害が出るに違いない。」そう思った私は、直ぐに課に戻り、テレビのニュースに目をやった。「東北地方沿岸部に大津波警報発令。予想される津波の高さは最大で1.5メートル。」という報道だった。内心「大津波警報？津波警報は知っているが、大津波警報ってどんな津波？」と思うとともに、「最大で1.5メートル位だったら、多少の被害が出ても、まあ、たいしたことないだろう。」と不謹慎にも楽観視した自分がいた。

ほどなく、被害状況確認のため、沿岸地域にいち早く飛んだ県警ヘリの「航空いわて」から信じられない無線通話が流れてきた。「現在、陸前高田地域を津波が飲み込んでいます。陸前高田地域は壊滅状態！！」私は耳を疑った。その後も、「航空いわて」は次々に沿岸地域のとても信じられない惨劇を報告し続けた。

2 救出救助隊出動

当署では、若手警察官を中心に救出救助隊が編成され、その日のうちに被災署である宮古警察署管内の田老地区に応援部隊を派遣した。田老地区は、住民自慢の「万里の長城」と呼ばれた高さ10メートルの防潮堤が町を守っていたが、大津波はいとも簡単にその長城を超え、田老地区を飲み込み全てを破壊していた。

後に、田老地区を襲った津波の高さは、約16メートルと試算された。

私は発災後3日目から署の若手警察官を連れ田老入りしたが、実は、私の前任地が県警察学校の教官であったことから、救出救助隊の隊員はそのほとんどが私の教え子であった。

その教え子の中には沿岸出身の者もあり、未だ家族と連絡がつかない者やテレビのニュース映像で、実家が津波に流されて行くのを見た者もいた。

私は、その子等が初任科生のころに、「警察官は、時に家族よりも住民を優先しなければならず、自らの命を賭けて目の前の人を守らなければならない時がある。それが自己犠牲の精神であり、警察魂である。その覚悟がない者はいつでもここを去れ。」と、折に触れ厳しく指導してきていた。

まさか、こんなに早く、そして現実にそのときを迎えようとは...

3 困難を極めた警察活動

田老地区へ初めて足を踏み入れ、その光景を目の当たりにしたとき、現実世界ではないような感覚を覚え、私の知っている田老は跡形もなくなっていた。あるのは引き波にさらわれ、「万里の長城」でせき止められたからなのか、4～5メートルの高さに折り重なるように地区全体に広がる瓦礫の山だけであった。

まず、我々が寝泊まりできる拠点を探さなければならなかった。壊滅的な被害を受けた田老地区において、唯一公共の建物で残っていた小学校の体育館や地区活動センター等は住民の避難所に使用されており、我々が使用できるスペースなど無かった。当時、物流も遮断され、ガソリンが枯渇状態であり、車中泊も避けなければならない状態であった。そして、最後に我々が選択した宿泊場所は、宮古北高等学校の体育館の一角であった。なぜか...。この体育館は検死場所であり、御遺体の安置所であったことから、暗くなると被災者は誰も入ってこなかったためである。

結局、無数の御遺体と共に同じ床の上で寝ることになったが、全く気にはならなかった。逆に、御遺体を寂しがらせずに良かったとさえ思えた。それよりも、3月にしては異常と思える寒さと体育館の底冷えによって、皆ほとんど眠れなかった。

翌朝になると、宮古署員が我々に食料を持ってきてくれたが、それは田老駐在所の駐在さんだった。田老駐在所もまた津波で流され、未だ建物自体が発見されていない状況だったらしく、駐在さんの制服と私服が混在した「ちぐはぐ」な姿が、それを物語っていた。

駐在さんは、一人につき、具も入らず、海苔も付かない堅い握り飯を2個と、水1本を我々に手渡し「すみません、これが今日一日分です。」と申し訳なさそうに言った。我々も食料に窮した状態であったので、貰えるだけでありがたかった。

瓦礫の中の捜索活動は困難を極め、次々に発見される御遺体の処理に追われ、救出救助隊という名の下に派遣されていたものの、救出救助した人は一人もなく、いつしか救出救助隊という名の「ご遺体捜索部隊」になっていた。

こんな厳しい環境の中でも、文句1つ愚痴1つ言わず黙々と任務を遂行する教え子達の顔付きは、一人前の警察官そのものであり、教え子達が成長した姿を目の前で実感できることは、私にとって唯一の喜びであった。

4 非情な伝達

捜索活動開始から数日後、副署長から私に連絡が入った。それは、「A 巡査部長のお父さんが御遺体で見つかった。御遺体を釜石署に引き取りに行かせなければならぬから A 巡査部長を部隊から外し、紫波署に一旦戻してくれ。」というものであり、それを私から A 巡査部長に伝えろと...

A 巡査部長もまた私の教え子であり、警察魂を熱く指導した一人でもあった。

「何と言ってやればいいのか。」「まさか、教え子に父親の死亡通告をしなければならないとは...。」私は、感情を押さえ、なるべく事務的に伝えようと決め、A 巡査部長を呼び、「お父さんが御遺体で見つかった。紫波署に一旦戻れ。」と伝えた。A 巡査部長は、「自分だけ部隊から外れてすみません。早く見つかって良かったです。」と返事をした。本当は泣きたかったろうに、私の手前、気丈に振る舞ったのだろう。

私は自分に問うた。「今までの私の指導は間違っていたのだろうか。これで良かったのだろうか。」と...

A 巡査部長のお父さんの火葬・葬儀は間もなく行われたが、私は勿論、紫波署員はおろか、同期生の一人も参列できた者はなく、香典すら渡せなかったことに、今でも申し訳ないと思っている。

5 全国警察の絆

岩手県には勿論のこと、被災 3 県には、全国警察から多大な支援、応援を頂いた。田老地区にも、多くの応援部隊に来ていただいた。

応援部隊の方々は、自分の県のことのように、真剣に、本気で活動していただき、また、我々に対する多くの励ましの言葉を頂いた。

中でも、遠方からの応援に対する感謝の言葉を伝えた私に、大阪府警の若い隊員が、「阪神大震災ではお世話になりましたので、今度は我々が恩返しする番です。」と真剣な眼差しで答えてくれたことが印象に残っている。阪神大震災の頃は未だ警察官を拝命しているはずもない若い隊員がこんな言葉を言ってくれるなんて、阪神大震災の時、大阪に応援出動した経験がある私にとっては、本当に嬉しかった。恐らく、阪神大震災当時を知る彼の上司先輩方が、そういう思いで行ってこいと送り出してくれたのであろうことは容易に理解でき、感謝の気持ちで胸が詰まった。

改めて、全国警察の固い絆を実感した。

6 震災から学んだもの

間もなく 3 年が経とうとしているが、震災を通じて私なりに学んだものは、

県民は、困難な状況になればなるほど、我々警察を頼りにしていること

全国警察は固い絆と強固な連帯で結ばれていること

一人一人が強い「警察魂」を持つことによって初めて警察活動ができること

自己犠牲の精神は我々警察官の神髄であること
である。

終わりに、警察官として未曾有の大震災に立ち向かったこの経験は、私にとって改めて警察官という仕事の重責と、この仕事を選んだ自分に対する誇りを思い出させてくれた。そして、この経験を今後の警察官人生に生かしながら、後輩に語り継いでいくことも、私に科せられた新たな重要な使命だと感じている。

「あの日」が残したもの	通 信 庶 務 課
	前 田 廣 美

退職を11日後に控え、「・・・これまでの38年間、大過なく過ごせたのも・・・」と、挨拶案を最後の勤務地となった山形県情報通信部で考えていた。

その時、うねるような揺れが、唸るような音とともにやってきた。歴史に残る「あの日」である。

庁舎の電気は消え、プリンター、コピー機等の冷却ファンが一瞬鳴りを潜めた。静寂の中から、「震源地は何処だ！早くテレビを点けろ！」の音が響き、発電機で動いたテレビは、信じられない震度、マグニチュードを伝えていた。

「落ち着け、落ち着け。」と自分に言い聞かせ、職員の安否確認と通信網の確認指示を出し、急いで災害対策室に詰めた。

幸い全職員の無事と、県内の通信網に異常のないことを確認できたが、多くの中継所が停電し発電機で動いていることが妙に気になった。

災害対策室の大型テレビモニターは、大津波警報の発令と津波の到達時間を繰り返していたが、やがて時間の経過とともに津波の被害状況に変わり始めた。

原発等の緊急停止が東北のみならず全国規模で起きており、計画停電の報道も出始めたため、中継所用発電機の燃料調達を急ぐことにした。幾ら立派な中継所であっても、電気がなければただの箱である。ありったけのポリタンクをかき集め、急いでガソリンスタンドに走らせた。しかし、給油設備が停電で動かず、「調達困難。」の連絡が相次いだ。諦めずに隣接市町村までエリアを広げ、辛うじて調達できたのは米沢市内であった。

県内の通信施設の被害は、停電を除けば致命的なものはなく、長期停電に備えて当面の燃料も確保できたので安心していましたが、その翌晩トラブルが発生した。山形本部と庄内地方を結ぶ主要中継所から、「火災」及び「発電機異常」の警報が出たのである。一転、非常事態である。

早く中継所に行って、状況を確認し、対策を講じなければ庄内方面が孤立する。しかし、中継所は元来雪深いところにあり、その年は特に雪が多かったため、急いで行くと遭難の危険があった。異常を告げる監視装置のメッセージから、何らかの原因で室温が上昇したが、火災に至っていないことは把握できた。しかし、発電機は実際に止まっており、中継所設備はバッテリーで動いている状態にあった。燃料は十分あるはずなのになぜ止まったのか。バッテリーで運転可能な明晩までには、何とかしなければと準備を急いだ。

防雪・防寒対策を念入りに行い、翌朝4時過ぎに体力に自信のある技官4人体制で本部庁舎を出発した。中継所手前6キロ程までは車で行けたが、後は人力で雪道を登らざるを得なかった。「スノーシュー」を着け雪の中を泳ぐように8時間ほどかけ、午後2時頃やっとの思いで中継所付近まで辿り着いた。しかし、「中継所が何処にも見当たらない。」と、信じがたい連絡が入る。やはり、例年を上回る雪にすっぽり埋まり、姿を隠していたのである。

上部だけ頭を出している鉄塔を頼りに、持参した携帯用の折りたたみスコップで入口付近をまさぐったが、一向に掘り当てることができない。携帯用スコップでは埒が明かないので、通常のスコップを応援先から一時帰県するへりに運んでもらうことにした。また、下山が遅くなることも想定し、泊まるためのシュラフ（寝袋）を一緒に積んだ。スコップは目標地点にピタリと投下されたが、軽いシュラフは、ヘリが巻き起こす風で隣の沢まで飛んで行ってしまった。回収は到底無理であり、大きな誤算であった。

投下されたスコップの威力は絶大であり、掘り出し作業は一気に進み、じきに中継所に入ることができた。急いで発電機の故障原因を調べると、発電機自体には異常が見られなかった。中継所を覆った雪が吸排気口を塞ぎ、酸欠になってエンジンが止まったのである。また、「火災」警報は、換気のない場所でエンジンが回り続けたため、室内が高温になったためと判断できた。

吸排気口の除雪を行い、再起動した発電機は、安定した運転を継続した。室温の上昇もなく、燃料も十分であることを確認し、下山する頃には日がとっぷりと暮れていた。

暗い中、下山するのは大変危険であったが、シュラフもなく食料も不十分なうえ、明日の天気も保証の限りでないため下山を急がせた。

若いとはいえ、早朝からの長時間にわたる雪道の登坂、そして除雪は相当に体力を奪っている筈であるが、月明かりで穏やかな天気が功を奏し、午後5時過ぎの下山から3時間ほどで駐車地点に到達することができた。

全員無事に下山し、駐車地点を出発したという無線連絡には、4人の技官の「成し得た満足感」と、何よりも通信の途絶を回避できた「安堵感」に溢れていた。

諸先輩から情報通信部の使命、そして存在意義は、「災害等で公衆電気通信網が途絶した状態においても、警察通信は途絶することなく警察活動を支えていることにある。」と言われてきた。この精神が、若い人にも引き継がれていると思えた。

中継所を保守する苦労は、世間はおろか県警にもほとんど知られてこなかった。東日本大震災を機に、中継所への燃料補給活動が国家公安委員長の目に留まり、新聞等で大きく報道されたことで世間の目に触れることになったが、中継所の保守はこれが当たり前であり、大変とは思いつつも日常的に行っていることであった。

とはいっても、これまでの苦勞が世間に認められたことは、素直に嬉しいことであった。ましてや、人事院総裁賞の受賞に至った喜びは、現職のみならずOBの方々にも及んでいたことを、新聞を見た先輩のメールが伝えていた。

停電も3～4日後には復電し、調達した燃料を被災県に提供できた喜びも大きかった。そして、管内は勿論全国的にも、通信の途絶を招くことなく警察活動に貢献できたことは、情報通信部の「存在意義」を大きく深め、情報通信部職員としての「使命」を果たせたと感じた。

当該中継所は、震災の翌年の平成24年に2階建てに改築され、雪に埋もれることは2度となくなった。

警察職員としての使命感

通 信 施 設 課

菅 原 直 樹

震災から間もなく3年が経とうとしていますが、当時のことを思い出しながら記したいと思います。当時私は、福島県情報通信部に所属していました。被災後、福島県警察本部のある建物は地震に弱く、近くの福島警察署に待避しなければなりませんでした。福島警察署のテレビで情報収集をしているときに、あの津波の状況を知りました。津波の被災状況を見たとき、これが現実なのか夢なのか分からなくなるほどの衝撃を受けました。さらに追い打ちをかけるかのように、福島第一原発が非常に危険な状態である旨のニュースが流れました。

私は当時、原発の恐怖に負けそうになりました。目に見えない放射能の恐怖を感じました。当時の職員たちも、「本当に爆発したらもう逃げるしかない。」「もう震災対応どころの話ではない。」と、恐怖に怯えていました。私も正直、福島第一原発には行きたくないと思っていました。しかし、いざ福島第一原発の映像配信が決まると、先ほどまで否定的なことを言っていた先輩たちが、積極的に機材を準備し、覚悟をもった表情で現地に赴きました。その表情からは、警察職員としての強い使命感を感じました。

その時、私は改めて自分が警察職員であるということを感じ知らされました。もちろん自分の命も大切ですが、大変な目に合っている国民の方々が警察に対して抱いている期待は大変大きいものであり、それに応える使命感が必要です。当時の私は、まだその使命感が足りていなかったのかもしれないかもしれません。必死に震災対応する先輩方の姿を目のあたりにし、私もより強い使命感を持ち、自分が警察職員であるということを感じなければならぬと感じました。私自身も何度か警戒区域に入り機動通信隊として活動をしましたが、あの先輩たちの姿があったからこそ、モチベーションを保つことができたのだと思います。

あのような震災は、もう2度と起きてほしくはありませんが、もしまた起こってしまった時、強い使命感を持って勇敢かつ的確に行動し、そのときの後輩たちに、あの時自分が感じたことと同じことを感じてもらえるよう努力していかなければならないと思います。使命感は急に湧いてくるものではありません。常日頃からの積み重ねだと思います。常日頃からの積み重ねを大事にし、いざという時に強い使命感を発揮することができるよう、日々精進していきたいと思っています。

「最後の砦」警察通信を守る！	青森県情報通信部
	岩 谷 茂 美

岩手県情報通信部で勤務していた2011年3月11日の14時46分、私は同僚と二人で官用車での出張からの帰路で盛岡市内を走行中に揺れを感じた。慌てて官用車を停止したものの、隣の車線に並んでいたタンクローリー車が大きく横揺れをして、自分たちの車両に倒れるのではないかという圧迫感と恐怖を感じた。すぐに落ち着くと思われた揺れは5分以上続き、揺れが落ち着いたと同時に信号機が滅灯したことで、事の大きさを感じ始めていた。渋滞する道路をかきわけながら県警本部に向かっている車内のラジオで津波警報の発令を知ったが、今までにない大きな津波の到達予報に唖然としながら県警本部に到着したことを今でも忘れることができない。

情報通信部に戻って、初めて津波の被害状況やインフラ被害状況を知ることができたが、警察通信設備にあっても例外ではなく、徐々にボディブローのように影響が出てきて、各警察署等の通信設備の救済をはじめ、警察署崩壊による代替施設への通信対策に優先順位を付けて救済措置を検討するなど夜を徹して対応に追われた。

職員は帰宅することもできず、徐々に疲労が蓄積していく様子が見て取ることができた。結果的に帰宅できたのは地震発生から丸二日が経っていたように思う。

特に、私に課せられた任務の中で誇りと使命感を感じたのは、地震発生から三日目の3月14日に取り組んだ無線中継所の電源救済のための燃料運搬である。無線中継所への経路は釜石市内を経て林道を通って行かなければならないが、津波によって無線中継所への経路と電線は断絶され、復旧までにはかなりの時間を要することが予想されたことから、無線中継所までの新たな搬送経路の開拓と発動発電機用の燃料搬送を同時に達成することが求められた。

機動通信課長補佐以下4名で被災した釜石市に向けて出発するも、到着するまで数カ所の通行規制を通り抜け、やっとの思いで釜石市の入口まで到着したが、遠くに見える釜石市内は津波による瓦礫の山と化し、自分の目を疑うような光景が飛び込んできた。その光景に驚く間もなく、自衛隊員によるご遺体の捜索活動を横目に見ながら瓦礫の中を縫うように進んだ。救出されたご遺体に合掌してはまた前進をする状態が続いた。座礁した大型貨物船や流されて家の上に取り残された自動車を見ながら、それでも所期の目的達成のために持参した地図のコピーを片手に、無線中継所までの最短の登山道模索を必死に検討した。

避難していた地元の住民に警察職員であることを告げると「ご苦労様です。」という感謝の声とともに、昔の記憶から登山道であろうという山道を教えてもらうことが

できた。その教えられた山道も途中から道がなくなり、地図だけを頼りに杉林を雪が舞う肌寒い中、半信半疑のままに突き進むこと2時間が過ぎた頃に、「おーい、ここだ。」という声が微かに聞こえた。したたる汗を拭きながら顔を上げると、先にヘリコプターで可搬形発動発電機搬送時にホイストで降下していた職員が、無線中継所の鉄塔に昇って手を振って待っていてくれた。

その後、その無線中継所は、可搬形発動発電機の燃料搬送、補給及びそのメンテナンス要員として、何も無い中継所の庁舎に3人一組で2泊する体制を編制して対応することとなった。食糧は非常食と缶詰を主にカップ麺等をお湯を沸かして食べ、トイレや風呂もない不自由な生活を強いられながらも、中継所の電力が復電する4月下旬まで、夜を徹して対応することができたのは、全ての民間通信網が機能しない中で警察通信のみが最後の通信手段として機能を維持させなければならないという使命感があったからである。これこそが、警察活動のみならず国民の生命財産を守る大きな役割を担っていた証であり、警察職員としての誇りと使命感を実感できた場面でもあった。

この大震災で培った経験から、次の着任地では無線中継所の発動発電機の備蓄燃料対策に取り組むとともに、冬期間の災害等に備えた防寒衣の整備や非常食の見直し等に積極的に取り組んだ。あの経験は、保全業務だけではない衣食住の面の充実の大切さを再確認することができたと感じている。また、自分の力だけでは限りのあるものでも組織全体が一丸となって取り組めば、いかなる困難も克服できるという実体験を糧とし、これからの業務に取り組んでいきたいと、震災の貴重な体験をしてから三年が経とうとしている今だからこそ、強く感じるものがある。

家族との絆	宮城県情報通信部
	平 明 美

2011年3月11日、多くの尊い命が奪われた忘れ去ることのできない東日本大震災が起きた日です。

私は、あの震災の中で、家族との絆の大切さ、命の尊さ、当たり前のように流れる日常がいかに大切でかけがえのないものなのかを思い知ることになったのです。その当たり前の大切さを忘れぬよう、この気持ちを風化させないよう、ここに記そうと思います。

私の家族は、夫と二人の息子の4人家族です。家族仲が悪い訳ではないのですが、それぞれの時間の都合が合わないため、あまりそう多くの会話をするという事はなく、「仲よし家族です。」と胸を張って大きな声で言えるわけではありません。そのせいか、家族の絆というものを普段感じることもありませんでした。しかし、そんな私が震災を機に家族の絆を実感することになったのです。

震災当時、夫は山形県情報通信部へ単身赴任中、長男が高校2年生、次男が小学6年生でした。

地震が起きた日、次男は普段通り学校があり、長男は春休み期間中にもかかわらず補習を受けるため高校へ行っており、私もいつもどおり勤務中でした。

14時46分、マグニチュード9.0、震度6強の地震発生。今まで体感したことのないとても強い大きな揺れに襲われました。私の勤務している管区警察局が入っている合同庁舎はとても古く、近々起きるであろう宮城県沖地震では、倒壊もしかねないと聞かされていたため、初めて命の危機を感じると同時に息子二人のことが頭をよぎりました。次男は携帯電話を持っていないため、長男に慌てて連絡を取ろうとしたのですが電話が通じません。こんな大きな地震が起き誰しものが携帯で連絡を取ろうとするのだから、回線がパンクし繋がらないのは当然なのですが、それでも何度もかけ直し、もし何かあったらと思うと不安でいてもたってもいられなくなりました。

すると、当時の上司の計らいで「すぐ帰りなさい。」という暖かい言葉をいただき、不安ばかりが募る中、急いで自宅に戻ろうとしたのですが地下鉄も動いておらず、歩いて帰ることを余儀なくされました。不安と焦りが私の歩く速度を自然と速めるも、同じように自宅を徒歩で目指す人の波が延々とつながっており思うように歩けませんでした。

同時刻、次男はなんとか無事だったらしく、生徒たちは小学校の校庭に保護者が迎えに来るまで待機させられていたようです。

依然連絡の取れない長男はというと、地震発生後すぐに自転車で学校を飛び出し、「母親は仕事のため直ぐに弟を迎えには行けないだろう。」と考え、次男の小学校へ急いで向かい、保護者として次男を保護し自宅まで連れ帰っていたのでした。

私がやっとの思いで自宅に辿り着いたのは、すでに日が落ちた後でした。次男から後でこの一件を聞いた時は、正直驚きを隠せませんでした。なぜなら、普段の二人の兄弟仲は、年齢が離れていることを考慮しても、お世辞にも仲が良いというわけではなかったからです。長男に「良く機転を利かして迎えに行ってくれたね。ありがとう。」とお礼を言うと「補習を抜け出す調度よい口実になった。」等と笑いながら言っていました。多分照れ隠しに違いありません。あの状況で授業が続けられるわけがないのですから。

普段いくらお互い無関心でいても、何かあった時は助け合えることができるという姿に、私は強く家族の絆を感じました。当たり前になる、いつものように何気なく過ごしていた日常の中では、気付かなかったことなのかもしれません。

「当たり前」というのは、実に厄介なものです。朝、目が覚めて身支度を整え、職場に向かい、夜になれば自宅に帰り家族と共にご飯を食べ何気ない会話を交わす。何も特別なこと等ない「当たり前」のことです。しかし、この当たり前の日常がいかに幸せなことだと理解しながら生活を送っている人がどれだけいるのでしょうか。多分ほとんどの人は、そういうことを特別に考えずに日々を送っていることでしょう。

例えば、何か幸せなことが起こったとすると、人はそのことに喜びを感じたり感謝したりするけれど、その幸せが何度も起こるようになるとそれに慣れを感じ、やがてそれが当たり前だと錯覚するようになり、喜びを感じることも感謝する気持ちも忘れるようになると思うのです。それは、家族と過ごす日常にも同じことがいえるのではないのでしょうか。普段何気なく流れていく当たり前の日々というのは、小さな幸せの積み重なり、折り重なりからなる、とてもかけがえのない時間だということを思い出し、忘れぬように胸に刻んでおく必要があると思うのです。それが東日本大震災を生き延びた私達に架せられたことなのではないのでしょうか。

最後にこの震災により亡くなられた方々、殉職された警察官のご冥福をお祈りします。

震災を振り返って(反省と教訓)

福島県情報通信部

中山義和

震災当時、自分は単身赴任先である山形県情報通信部の執務室で勤務していました。執務室内で勤務していた多くの職員の携帯から響く地震警報の音、その音に間髪を入れずに続く徐々に大きくなる揺れは、とっさに「今までに経験したことがない地震である」ことを感じさせるものでした。長く大きな揺れが収まった直後、執務室には「テレビを付ける。」「警報を確認しろ。」「出張者を把握し連絡を取れ。」など様々な指示が飛び交いました。執務室に流れるテレビ放送では「緊急地震速報」だけでなく「大津波警報」、「津波の高さ10m超」という今まで耳にしたことのない音声が流れていました。これが、未曾有の災害への対応のスタートでした。

まず考えたのは、これから組織としてどんな活動をしなければならないのか、また、そのために自分が何をしなければならないのかということでした。幸か不幸か、宮城に複数回勤務したことのある自分は「岩手・宮城内陸地震」を始め、大きな地震が発生した際の活動に対して複数回の経験を持っていました。それは自身の経験だけでなく、同時期に勤務していた多くの職員の行動を「目にし」、それを知識として得ていたことにも大きな意味がありました。

状況を把握し、集約化する。その情報を職員間で共有するとともに後々確認できるように記録を残すというものです。ホワイトボードを執務室に準備し、執務室にいた職員に「どんなことでもここに書き込んでくれ。」「誰でも良いから情報が新しくなったら更新してくれ。」と話した記憶があります。書き込まれる情報は多岐に及びますが、全てそこに集約することで指揮する人間の判断材料となります。その後の約1か月間、ホワイトボードが執務室から運び出されることはありませんでした。

普段の仕事でも「情報の共有化」は求められますが、全ては仕事を進める上で「最善の方策」を見つけるためであります。なおさら、有事の際には職員が情報を共有し、数多くの困難な事象ひとつひとつに対処すべきと考えます。

今後、東日本大震災のような災害が再び起こるかもしれません。あるいは、災害だけでなく、事件、事故もなくなることはありません。できれば、同じ経験はしたくはありませんが、今回の震災で得た経験は無駄にせず行動できればと考えます。また、震災を経験したことがない職員が今後増えることから、この活動の経験を知識として伝えることにより、有事の際の目印となることを期待します。

震災を振り返って	福島県情報通信部
	小林 展隆

東日本大震災からもう間もなく3年が経とうとしており、当時の記憶がかなり薄れてきているが、当時の記憶と向き合い、私自身が何を体験し、何を考えたのかを振り返ってみたいと思う。

私は、平成21年度から警察庁刑事局犯罪鑑識官へ出向しており、鑑識業務に関するシステムの開発や保守管理業務に携わっていた。出向して間もなく2年を経過しようというところで、初めての他局での業務、初めての東京での生活にようやく慣れた頃でもあった。

平成23年3月11日午後、今まで経験したことのない揺れに襲われた。私の勤務先である霞が関の警察総合庁舎もこの地震による揺れは10分以上続いた。執務室の窓ガラスが割れ、幹部の座る窓際はガラスの破片だらけとなり、机の上の書類はなぎ倒された。30年以内に発生する確率が99%と言われていた所謂「宮城県沖地震」が来た！と直感した。しかし、直後に見たニュースで「千年に一度の規模の地震」だと知り衝撃を受けた。普段使われているのを見たことのない職場の公衆電話は家族への安否確認のため行列ができ、窓から見える桜田門交差点は大渋滞となり、歩道も通勤ラッシュ時をはるかに超えたおびただしい数の人が急ぎ足で歩いていた。JR、私鉄、地下鉄など公共交通機関が全てストップしたためである。その日は、帰宅を断念し職場に泊まることにした。業務もほとんど手につかず、テレビから流れてくる津波等の被害状況を見て、ただただショックを受けていた。福島市に住む両親と弟とはなかなか連絡がつかずイライラが募った。

そして東京電力福島第一原子力発電所の事故の発生を知り、正直、私の故郷である福島は、「終わった」と思った。両親と弟には、原発の状況次第では直ちに福島を捨て東京へ避難してくるよう勧めた。その後、原発事故の深刻な事態は収拾に向かったものの、放射線量が高い地域に住む親戚や知人が次々と福島県内外へ避難した。特に悔しい気持ちになったのは、「首都圏に福島から避難してきた転校生がイジメにあったり、福島ナンバーが付いている車両というだけで、立ち退きを求められた」という事実を知ったときだった。福島第一・第二原子力発電所がそれまで首都圏の電力供給に多大な貢献をしてきたはずなのに、その立地県の人間に対する人権侵害や差別である。「心をひとつに」「がんばろうニッポン」などキャッチフレーズを掲げ、日本人は我が国全体で一丸となって復興を願っているはずであり、前述のような事例は極々一部であると信じたい。毎日、新聞やニュースで見聞きする、被災地の惨状、原発

や放射線量の状況、それによって遅れる復興、避難者の苦境など目のあたりにするものの、何一つ復興に貢献出来ない環境にある自分に不甲斐なさを感じざるを得なかった。

出向最終年度の3年目に入り、私は勤務希望調書に記入する希望勤務地について、故郷福島に貢献するため福島勤務の希望を出すか、このまま東京勤務を続けるか、大いに悩んだ。当時、原発事故は収束に向かっていたとはいっても、放射線量は相当高く、当時4歳と1歳になる子供達を連れて行くのは、残酷とも思えた。両親からは、「若い二人の孫のため、しばらくは福島には帰ってくるな。」と言われていた。犯罪鑑識官の上司からは「東京にこのまま残りなさい。上に掛け合うから。」とまで言っていた。しかしながら、私は、「自分の生まれ育った故郷を見捨てるわけにはいかない。」「今の福島のために本気で働けるのは、福島で生まれ育った人間ではないのか。」と考えるに至り、妻の理解を得て福島勤務の希望を出すことにした。

いま思えば、「2人の子供達には取り返しの付かない選択をしてしまったかも知れない。」「将来、福島育ちというだけで何らかの不利益を被るかも知れない。」等と考えることもあるが、後悔はしていない。私は、福島で生まれ育った人間のひとりとして胸を張り、誇りを持って生きていきたいと考えている。